

あかつきの別れはいつも露けきには世に知らぬ秋の空かな

光源氏

『源氏物語』「賢木」の一首。

源氏と六条御息所の物語は、ドラマチックで恐ろしい前

篇（「葵」の巻）から、優艶で寂しい後篇（「賢木」の巻）

へと展開する。嫉妬のあまり生霊となつて源氏の正妻・葵

上を亡き者としてしまった御息所は、いまは嵯峨野の野宮

で暮らす。斎宮として伊勢に下る娘とともに潔斎の日々を

過ごしている。その伊勢下行が迫るころ、源氏が訪れる。

かすかに光る夕暮れの篝火を見ながら訪問し、夕月夜に

照らされながら対面し、さらに月の入りの夜半から夜明け。

二人は語り明かしたようでもあり、最後の関係を結んだよ

うでもある。そして後朝の贈答歌が交わされる。御息所の

返歌はこの歌。

おほかたの秋の別れも悲しきに鳴くねな添へそ野辺の

松虫

御息所



（源氏）「暁の別れはいつも涙に濡れるもの。しかし今朝は

これまで覚えのないほどに悲しい色をした秋の空だ。」

（御息所）「秋の別れというだけでも悲しいのに、さらに悲

しくなってしまうような鳴く音を聞かせないで、松虫よ。」

松虫はいまの鈴虫。それはそうでしょう。この場面では

チンチロリンでなくリンリンでなければ。

胸に迫る別れの贈答歌である。「こは世にしらぬ秋の空

かな」の詠嘆には、源氏の偽らざる悲しみが滲み、「鳴く

ねな添へそ」の途切れるようなリズムには、かろうじて耐

える御息所の苦しい息遣いが感じられる。

そんなに悲しいなら別れなければいいじゃないの、と若

いころには思っただけれど、それはちがう。この恋はもう修

復不可能なのだと二人ともわかっていた。だからこそこの

ときたった一度、しんじつ情が通ったにちがいないのだ。

二人の関係においてはじめての、男からの贈答歌であるこ

とも見逃してはならない。

二十年以上のちに死霊となつて現れる御息所を、源氏も

読者も、まだ知らない。

（小島ゆかり）